

# 2019年度事業報告書

2019年4月1日から

2020年3月31日まで

公益財団法人 森林文化協会

## 1. 総論

2019年度は、世界各地で激しい気候変動や大規模な森林開催などの自然災害が発生し、その原因とされる地球温暖化への関心が一段と高まった。

森林文化協会は「調査・研究」「森づくり・森の支援」「普及啓発」からなる公益目的事業を着実に実施し、森林の保護・活性化を通して、国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）の推進を後押しした。

月刊『グリーン・パワー』などの出版物の発行やシンポジウムなどのイベントの実施に際しては、森林や地球環境の現状をわかりやすく伝え、理解や関心が広がるように心がけた。「木育」をはじめ、森林や地球環境の未来を担う人材の育成に力を入れた。

公益目的事業を継続していくには、安定した財政基盤が必要である。引き続き経営体質の強化に努めた結果、19年度の収支は339万円の赤字で、前年度と比べて赤字額を約33万円圧縮した。

## 2. 調査・研究（公1：森林試験研究事業）

森林の利用方法や保全、林業の在り方などを総合的に研究し、その成果を広く発信することで社会への貢献を目指した。

### 〔1〕森林環境研究会

森林文化協会が設置する専門委員会。森林や環境の研究に携わる学者と環境問題に関心を持つジャーナリストの約10人で幹事会を構成している。19年度の幹事会は、7月12日（金）と12月27日（金）に朝日新聞東京本社に参集して開催。2020年3月17日（火）に予定していた3回目の幹事会は、新型コロナウイルスの影響により研究会のメーリングリストを使った書面会議の形で、それぞれ協会の活動への助言を受け、当該年度の研究テーマに沿った調査研究活動を実施した。

<幹事会の構成>（五十音順、肩書は19年度）

青木謙治・東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

一ノ瀬友博・慶應義塾大学環境情報学部教授

井上真・早稲田大学人間科学学術院教授（座長）

鎌田磨人・徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授

小森敦司・朝日新聞経済部記者

酒井章子・京都大学生態学研究センター教授

田中俊徳・東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授  
田中伸彦・東海大学観光学部教授（座長代理）  
則定真利子・東京大学アジア生物資源環境研究センター准教授  
原田一宏・名古屋大学大学院生命農学研究科教授  
村山知博・朝日新聞論説委員

## 〔2〕学術年報事業『森林環境』の編集・発行

『森林環境』＝写真＝は04年から発行を続けている森林環境研究会編著の年報。今回の特集テーマは「暮らしの中の熱帯」。コーヒー・バナナ・カカオや、シナモンやカルダモンといった香辛料、植物油脂や洗剤に活用されるパーム油、名前も聞いたこともないようなアフリカや南アメリカの植物など、日本に輸入されているモノに焦点を合わせ、生産者側の世界を見た。

例えばマレーシアから日本に輸入されている木材の一部は違法伐採だ。インドネシアの企業は、地域住民がもともと利用してきた森林から紙・パルプを得るために住民を追い出すなど、人権にかかわるような問題を引き起こしている。過度の森林伐採は、生物多様性消失の脅威にもなる。特集を通じ、日本人はこのようなモノの背景にあるコト（物語）にもっと目を向け、想像力を豊かにしてほしいと訴えた。

そのほか、四つの最新的话题を「トレンド・レビュー」として取り上げ、2019年に発表された森林や環境問題に関わるトピックスを年表に収録した。

経費を削減するため前年の『森林環境2019』の方式を踏襲し、特集の論考15本を後述する月刊『グリーン・パワー（GP）』2019年1月号～12月号に分けて掲載し、年報にまとめ直した。責任編集者は原田一宏・名古屋大学教授と井上真・早稲田大学教授が務めた。

発行日は20年3月15日として、この日から協会ホームページにPDFを掲載して、無料で公開した。印刷物としての入手を希望する声に対応するため、オンデマンド印刷での発行は続けていく。



### 3. 森づくり・森の支援（公2：森林環境保全事業）

#### 〔1〕「つくば万博の森」実験林事業

つくば万博の森は茨城県つくば市にある宝篋山（<sup>ほうきょうさん</sup>標高 461m）中腹の松枯れして皆伐された約 10 ヘクタールの国有林で、朝日新聞社の呼びかけで全国約 4 万 2 千人から集まった寄付金を基に、1985 年に約 3,000 本、86 年に約 2 万 7,000 本、計約 3 万本のヒノキを植樹した。その後、協会が維持管理を担い、関東森林管理局と 2045 年まで 60 年間の分収造林契約を結んでいる。

宝篋山は首都圏近郊の登山・ハイキングのコースとして人気がある。森林文化協会としても森づくり支援いっそう進めていくため、地元のグループや団体と良好な関係作りをめざしている。

その一つとして、地元の市民グループ宝篋山アルペン倶楽部（太田和良会長）が主催している「宝篋山ハイキング」を 17 年から後援している（他につくば市、同市教育委員会、同志社校友会茨城県支部も後援）。



（写真は第 32 回目の山頂コンサートの様子）

第 31 回目は 19 年 6 月 2 日（日）、第 32 回目は 11 月 17 日（日）に開催され、それぞれ 60 名を超えた。リピーターだけでなく、新規参加者が徐々に増えている。2020 年度も後援を続ける予定。

#### 〔2〕国際森林デー「みどりの地球を未来へ」イベント

国連が定めた「国際森林デー」（3 月 21 日）にちなんだ国内各地の取り組みの中央行事「国際森林デー2020」を 20 年 4 月、神奈川県内で地域の児童を招き、植樹を行うイベントとして開催予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大があり、その影響を鑑みて中止とした。

#### 〔3〕関連活動：森林の保全・利用に取り組む団体への支援

##### ① 「くつきの森」の利用・管理支援

「くつきの森」は、滋賀県高島市朽木にある。現在は地元の NPO 法人・麻生里山センターが管理する市有地（約 150 ヘクタール）であり、クヌギなどを主体とした里山林となっている。麻生里山センターは地元の麻生地区をはじめ

高島市や支援企業、地元の研究者などと連携して、森林や草原の再生・活用に関するプログラムを展開している。19年度は、ホームページで紹介するなどその企画・運営を支援した。

## ② 「上ノ原・入会の森」の利用・管理支援

「上ノ原・入会の森」は、群馬県みなかみ町藤原にある。東京の市民団体・森林塾青水が管理する町有地（約21ヘクタール）であり、ミズナラを主体とした二次林と、ススキ草原からなる。森林塾青水は地元藤原地区の住民やみなかみ町、支援企業と協力して、旧薪炭林の保全や茅場（ススキ草原）の再生などに関するプログラムを展開している。19年度も、春の野焼きや隣接する夏の防火帯整備、ミズナラ林の遊歩道整備に参加するなど、引き続き運営に協力した。



（写真は、過去の「野焼き用防火帯整備」の様子）

## ③ 「日本の自然」写真コンテスト

朝日新聞社、全日本写真連盟による「日本の自然」写真コンテストに2018年度から森林文化協会賞を設けるなど、その活動に積極的に加わってきた。2019年度の森林文化協会賞は、井上正和氏（新潟県）の「雲海を纏（まとう）星峠の棚田」が受賞した。

## 4. 普及啓発事業（公3：森林普及啓発事業）

月刊『グリーン・パワー』の発行やホームページなどのデジタル媒体を活用し、分かりやすい情報発信につとめた。

### [1] 情報発信事業

#### ① 森と人の文化誌『グリーン・パワー』（月刊）の発行

『グリーン・パワー』は1979年創刊の森林文化に関する月刊情報誌（36ページ、うちカラー16ページ）。現在の発行部数は約3,000部。19年度は、これからのクマとの付き合い方を考える「増えるクマ 減る人間」や、ふじのくに地球環境史ミュージアムの教授陣が静岡の豊かな自然についてまとめた「ハマルル

超絶自然」、竹中大工道具館のスタッフによる「再発見 大工道具の魅力」などを連載した。

また2020年1月号＝写真＝からは森林がもつ多様な生態系機能を活用した森林浴を紹介する「森林アメニティのすすめ」や、地球にしか存在しない「土壌」について語る「土のふしぎ」など、身近な文化・自然の魅力を探求する連載を始め、若い世代の関心をよりかき立てることに力を入れた。また、「森林文化通信」欄を常設とし、協会に係わる最新情報をより詳しく読者に届ける。



## ② デジタルによる情報発信

森林への理解を深める普及啓発活動の推進と、若い人に向けての情報発信を強化するため、協会のホームページを積極的に活用した。以来、活動報告やイベント募集など情報発信に努めた。19年度の利用者アクセス総件数は年間117,760件となり、月間平均で1万件に近い利用となった。

調査研究活動の成果などを広く利用してもらうために始めた年報『森林環境』や、過去に発行された『グリーン・パワー』の無料ダウンロードを19年度も継続した。このほか、希望する会員向けのメールマガジンやフェイスブックなども情報発信に利用した。

## 〔2〕 森林研修事業

木や森の恵みを子育てに生かす「木育」に焦点を当て、森と地球環境の大切さを次世代に伝える活動にも力を入れた。

### ① 「国民参加の<sup>もり</sup>森林づくり」シンポジウム

2019年の「国民参加の森林（もり）づくり」シンポジウムを10月12日（土）、札幌市の北海道大学「高等教育推進機構大講堂」で開き、約300人が参加した。「北海道の『木育』わたしたちの『木育』これからの『木育』」をテーマに、基調講演や事例報告、パネルディスカッションがあった。

タレントで構成作家の鈴井貴之氏が「森は生きている。そしてその森で僕は生きている」をテーマに基調講演。生まれ故郷の北海道赤平市で、原野を切り開い



て住居にした体験談を披露した。

続く事例発表では、「『音』をキーワードにした木育の推進」「木工ワークショップで伝える木の良さ、手作りの良さ」「苫東・和みの森が、様々な人の人生を変えた」の3つの木育活動が紹介された。

パネルディスカッションは「わたしを変えた『木育』、社会を変える『木育』」がテーマ。宮本英樹北海道観光まちづくりセンター代表社員、大沼流山牧場代表取締役CEOがコーディネーターを務め、パネリストの煙山泰子氏（KEM工房主宰、木育ファミリー顧問）、上田融氏（いぶり自然学校代表理事、苫東・和みの森運営協議会副会長）、鈴木道和氏（北海道水産林務部森林環境局長兼全国育樹祭推進室長）が登壇、それぞれの立場からの報告があった。会場の参加者と対話をする場面もあり、「木育」の効果やこれからの取り組みについて、様々な意見交換をした。



(写真は事例発表の様子)



(写真はパネルディスカッションの様子)

【日時】 2019年10月12日（土）午後1時～4時

【会場】 札幌市 北海道大学「高等教育推進機構大講堂」

【テーマ】 北海道の『木育』わたしたちの『木育』これからの『木育』

【参加者】 約300人

【主催】 森林文化協会、朝日新聞社、国土緑化推進機構、北海道

【後援】 林野庁、美しい森林づくり全国推進会議

## ② 森林と健康シンポジウム

森林の癒やし効果などに注目した「森林と健康シンポジウム」を19年6月22日、東京農業大学で開催した。日本森林保健学会、東京農業大学、森林文化協会の合同主催。森林と人間とのかかわり方について幅広く考えた。120人の学生や市民が参加した。



(写真はパネルディスカッションの様子)

### ③ 皇居・東御苑野外セミナー

皇居・東御苑の植物や歴史、文化を訪ねる森林文化協会主催の野外セミナーを6月9日（日）開催した。定員60人に対して約340人の応募があり、抽選となった。首都圏をはじめ岩手、京都からの人を含む20代から80代が参加した。

秋は11月24日（日）に予定していたが、「大嘗祭一般参観」と日程が重なり、周辺の混雑を鑑みて中止とした。



(写真はハナショウブ)

### ④ 赤沢森林浴

「森林浴」発祥の地、信州「赤沢自然休養林」で1982年から地元の上松町とともに主催している野外セミナー。「赤沢自然休養林」は2006年4月に第1期セラピー基地に認定された。森林の持つ癒しの力を活用する研究が進んでいる。

第57回は5月26日（日）、定員を超える90名が参加。ふだんは立ち入りが制限されている保護林を歩く「学術研究コース」、ゆっくりと散策できる「ふれあいコース」、新設された「リラックスコース」の3つから選択。地元の木曽森林管理署やNPO法人「木曽ひのきの森」の人たちのガイドで歩けるのが特色。ヒノキをはじめ、サワラ、ネズコ、アスナロといった針葉樹が中心の森を4時間ほど歩き、澄んだ空気を体全身で受け止め、爽やかな汗を流した。

秋の部の第58回大会は、10月6日（日）に開催された。快晴の下、首都圏、名古屋都市圏から70名を超える方々が森林浴に参加した。



(写真は森林浴の様子)

### ⑤ 木曽路ヘルスツーリズム

長野県の豊かな自然に触れながら、日ごろの疲れをリフレッシュしてもらおう上松町観光協会、木曽観光連盟、木曽おんたけ観光局主催の「木曽路ヘルスツーリズム」企画を後援した。いずれも、長野県地域発元気づくり支援金事業の認定を受けた。



(写真はメンタル・ヘルスマニターコースの様子)



## ⑥ 海外木育ツアー

「木育」をテーマに森の国ドイツを訪ねる「幼児教育研修旅行」が定着し、ヨーロッパ各国に広がってきた。国際空港旅行サービスと提携したこのツアーは全国の幼稚園・保育園の経営者、先生らを対象に催行。リピーターも出てきている。第7回目を6月にドイツとオランダで、第8回目はイタリアで、第9回目は森の国フィンランドで、そして第10回目を20年1月にドイツで実施した。



(写真は第9回フィンランド・森の中で行われている教室の様子)

## ⑦ 森のベースキャンプ

各地の森を訪ね、自然に触れる“ベースキャンプ”としてJR東日本の滞在型宿泊施設ホテルフォルクローロ、ホテルファミリーオと契約し、協会会員が10%割引料金で利用できるサービスを継続した。

<ホテルフォルクローロ> 角館、大湊、花巻東和、高畠、三陸釜石

<ホテルファミリーオ> みなかみ、佐渡相川、館山

## ⑧ 東京おもちゃ美術館の「木育サミット」を後援

木育の国内展開としては、東京おもちゃ美術館が主催する「木育サミット」への後援活動がある。今年度2月8日(土)、東京都江東区新木場で開催された。木に親しみ、木を生かし、木と共に生きていく「木育」の活動を全国に広めていくことを目的にしたイベントで、引き続き支援していく。

## 5. 一般会務

### 〔1〕理事会・評議員会

#### ① 第1回理事会 5月15日

2018年度事業報告書、同決算報告書の各承認決議、定時評議員会招集の決議、理事長・常務理事の業務執行状況の報告

#### ② 定時評議員会 6月5日

監事選任の決議、2018年度事業報告、同決算報告、2019年度事業計画及び予算の各報告

#### ③ 第2回理事会 2020年3月25日

2020年度事業計画、予算の各承認決議

〔2〕 財政部門 ※予算・決算の金額は1万円未満切り捨て

収支は339万円の赤字で、19年度予算で見込んでいた赤字額(538万円)を大きく改善し、経営体質の改善につなげることができた。

① 経常収益

収益総額は4,252万円。前期比134万円減、予算比159万円減だった。受取会費は899万円で前期実績(931万円)に及ばなかった。また、受取寄付金は2,774万円で前期(2,874万円)と比べて100万円の減収となった。

② 経常費用

経常費用は総額4,592万円。引き続きコスト削減につとめ、前期比168万円減、予算比は358万円減となった。

このうち公益事業会計の費用である事業費は総額3,671万円で前期比135万円減、予算比284万円減だった。前期と比べて諸謝金86万円(前期74万円)、雑費70万円(同51万円)などが増加した。一方で給料手当1,039万円(前期1,102万円)、消耗品費18万円(同49万円)などを減らした。

法人会計の費用(支出)である管理費は総額920万円で前期比32万円減。予算比では74万円減だった。事業費、管理費のうち人件費関連の費用(報酬、給与、退職金、社会保険料等)の総額は2,037万円(前期2,164万円)。費用全体の44.4%(同45.5%)を占めた。

〔3〕 会員及び寄付

会員の新規獲得や継続、寄付の増収に引き続き力を入れたが、受取会費は899万円で前期比31万円減だった。

① 会員

19年度末の総会員数は1,860件(前期比93件減)。内訳は一般会員(個人)1,678件、団体会員(市民・地方自治)25件、企業会員(法人)25件、その他「グリーン・パワー」年間購読者132件だった。世代別では70代が約40%で最も多く、次いで60代が21%だった。

② 寄付金

寄付金の総額は2,774万円で、2011年度以降8期連続の前期割れとなった。会員の高齢化に伴う会員数の減少が響き、寄付金の減少傾向が続いている。

以上